令和5年度〔 自己評価報告書

学校番号	学 校 名	校 長 名
81	川崎市立菅生小学校	藤中　大洋

学 校 教 育 目 標	今年度の重点目標
・「明るく元気でたくましい子」の育成 ・「よく考え進んで創造する子」の育成 ・「豊かな心で力を合わせる子」の育成	◆明るく元気でたくましい子 ◎健やかな体の育成と健康・安全教育の充実 ◆よく考え進んで創造する子 ◎確かな学力の定着と個に応じた指導の充実 ◆豊かな心で力を合わせる子 ◎豊かな人間性の育成と人権尊重教育の充実

評価項目		具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1	明るく元気でたくましい子	◎運動に親しみ健康的な生活ができるように指導した。	校庭で全学年が休み時間に伸び伸びと遊ぶ姿が見られる。朝スポーツも、朝の時間を使って、異学年で交流したり体を動かしたりしている。放課後遊びも生き生きと遊んでいる。進んで運動し健康的な生活ができていると感じている児童・保護者が多く、全体の8割が肯定的な回答をしていた。また職員についても同様に感じていて10割が肯定的な回答だった。次年度から川崎きらきらチャレンジや校庭開放プロジェクトが始まる。こうした取組に積極的に参画していきたい。	全体としては、外で元気よく体を動かすことを楽しんでいる児童が多いが、室内遊びを好む児童もいるという現状もいなめない。室内遊びが悪いということではないが、体を動かす楽しさと、健康的な生活を送るために、今後も運動に親しんでいけるよう指導を続けていく必要を感じる。また、安全に遊ぶためには、遊び方のルールや使用の仕方などの共通理解が大切になってくるので、遊び方や使用の仕方について継続して教職員で検討し、児童が、今後も運動に親しみ健康的な生活ができるよう指導を考える。川崎市できらきらチャレンジや校庭開放プロジェクトがスタートする。全校で意識して取り組むことで更なる高みを目指す。
2		◎約束やルールをきちんと守って生活できるように指導した。	本校の約束である、「すがおっ子のやくそく」をもとに、全職員で共通理解をし、子ども達が安全に楽しく学校生活を送れるようにしてきた。児童は8割5分、保護者は9割、職員は8割5分ができていると感じている。全体的には約束、ルールは守れているが、気になった時はそのままにせず手立てをとっていくことが大切である。年間反省で話し合うのではなく、児童指導部会や職員会議でも適宜見直していきたい。	年度始めに児童に学級活動で指導するとともに、懇談会やプリント配布を通し、「すがおっ子のやくそく」を保護者にも知ってもらうようにした。職員が共通理解をし、同じ指導をしていくようにすることで、児童にも不安感や不信感を与えないようにすることが大切である。職員全員が同じように指導していくことを意識し、規範意識を高めるようにしたが、まだ細かな点でズレが見られた。引き続き児童指導部会を中心に話し合いを随時行っていく。
3		◎自分の役割や仕事に積極的に取り組むように指導した。	学級においては、当番活動や係活動をしっかりと行えるように支援している。また、学年に応じて、実行委員や委員会活動などを経験し、みんなのために主体的に活動する経験を積んできた。アンケートを見てみると、できていると感じている児童は8割4分、保護者は8割5分、職員については、9割3分であった。今後も、子ども達の自主性を大切にしながら、学校の一員としての自覚がもてるように支援し、責任をもって仕事に取り組めるようにしていきたい。	児童は小学校に入学してから、当番や係活動を経験してきている。また実行委員についても低学年から経験し、クラスだけでなく、学年や学校のために、やりがいをもって取り組めるようにしていく機会を増やしている。高学年の委員会活動については、菅生小学校を支えいるという意識をもてるようにし、奉仕活動と創造的な活動という両面から、児童の育成に引き続き努めていけるようにする。
4	よく考え進んで創造する子	◎学習したことが身につくように指導した。	学習したことが身についているについては、そう思うと感じている児童8割5分、保護者8割6分、教職員は8割8分となっている。基礎的な知識・技能を身に付けることを意識したわかりやすい授業を行うことが大切である。思わないと感じている児童もいるので、一人一人に寄り添った指導の仕方の改善も必要である。	基本的な知識・技能を身に付けることを大切にしながらも、授業を工夫し、楽しくわかる授業を展開できるように、努めていく。また、全員が理解できるよう個別指導を大切にし、一人一人に必要に応じて支援していく。学校としても、校内研究、教材研究、開発の充実、研修など職員が積極的に参加できるよう促していく。また、学習サポーターを計画的に配置して個に応じた指導の充実を図る。
5		◎学習に対し、最後まであきらめずに取り組むように指導した。	「とても思う」「思う」を含めて考察すると、児童・職員が約9割、保護者が約8割という結果となった。社会科の研究推進校になって子ども自らが課題を見出すように教材研究を心がけたことにより粘り強く学習するようになったと推察できる。一人でも多くの児童が粘り強く最後まで学習に取り組めるようにしていくために、引き続き教師は児童に寄り添い、丁寧に指導をしていく手立てを考え、実践することが大切である。	児童は、課題に対して途中であきらめずに、自力で解決しようとする気持ちをもつことが大切だと感じる。そのための手立てとして、ズレや憧れから自ら課題を見出すように教材との出会いを生み出したり、解決するために積極的に質問したり意見を述べたりできる人間関係づくりや環境づくりを進めていきたい。また、振り返りで自分の成長したことや新たな課題を見出すなど行っていく。
6		◎自分の考えを話したり、先生や友達の話を最後まで聞いたりするように指導した。	社会科の研究推進を受ける前まで「聞いて　伝えて　言葉で広がる菅生っ子」という研究テーマで国語の校内研究を進めてきた。授業中に自分の考えを伝え合う活動を多く設定し、相手意識をもって話をしたり聞いたりする指導をしてきた成果が今年度も表れた。全体的に「とても思う」「思う」を含めると児童・職員は約9割が成果を感じている。児童の半分近くが「とても思う」と回答していることから良好な学級風土のクラスが多いと考えられる。	継続してきた指導の成果が表れている。成果を生かしながら学年に応じた指導の継続が大切である。それに加え、各学年の系統や身につけさせたい力を各教科ともにはっきりさせて今後も話し方、聞き方の指導の充実を図っていく。同時に、保護者にも学習の取り組みを学習参観や学校公開日等で積極的に発信していくことも大切にしていきたい。

7	豊かな心で力を合わせる子	◎あいさつや言葉づかい、返事がきちんとできるように指導した。	アンケートの結果では、肯定的にとらえた割合は児童が約9割、保護者は約8割と高い数値である。学級・学年で朝のあいさつ運動に取り組んだり、委員会活動で自主的に活動したりする姿が見られたことからも、児童自身が日頃から意識をもち生活していたことが分かる。一方、職員は言葉遣いに課題があると考えていることから約7割に止まった。	気持ちの良いあいさつや丁寧な言葉遣いができるように、学校や学級で指導を継続していく。委員会活動や学年、学級での自主的なあいさつ運動も継続していきたい。また、こうした取り組みを懇談会やPTAの会議、運営協議会、地域境域会議等で保護者や地域住民へも積極的に発信していくようにする。
8		◎友達に思いやりをもって接するように指導した。	アンケートの結果では、児童、保護者、職員共にそう思うと答えた割合が9割を越えた。この結果より、友達を大切にしようとする気持ちが育ってきていることが分かる。いじめ防止の学習やSOSの出し方・受け止め方教育の実践から、つらいことを発信する大切さ、困っている友達に気づき、思いやりをもって接することの大切さが浸透してきている。優しい気持ちをもって関われるよう、今後もより良い人間関係を構築していきたい。	友達に対して思いやりや優しさをもてるように今後も指導を継続していく。友達との関わり方について考えたり話したりする機会を積極的に設けて自分だけでなく、相手も大切にする気持ちをさらに育てるようにしていく。次年度も異学年交流を大切にしていく。また、道徳や共生*共育プログラム等、様々な学習の取り組みを学校生活の中で生かせるようにする。
9		◎子どもからの相談に対しては、適切に対処するように努めた。	担任のみでなく、支援教育コーディネーターを中心にして児童や保護者からの相談に対応するように努めてきた。また、今年度から学校巡回カウンセラーと連携をとりながら対応している。アンケートでは、職員は9割7分と高いが、児童が7割5分、保護者が6割5分と回答しており、やや低くなっている。職員全員で児童と保護者が相談しやすい環境づくりに力を入れていくようにする。	日頃から児童の様子をよく観察し、初期対応を心がけ、何か問題が起きたときには、問題が大きくならないように早い段階で対応していく。また、児童や保護者からの相談に対して、担任はじめ支援教育コーディネーター、学年及び全職員の協力を得ながら個人に任せず学校全体で行う。個人面談や教育相談で保護者の思いを丁寧に聞き取っていくようにすることが大切である。今後は、教育相談の仕方等研修をしていく。
10	保護者連携	◎学校だよりや学年だより等を発行することで教育活動について知らせるようにした。	月初めに学校だよりや学年だよりを発行し、ホームページの更新も確実に行うことができた。また、学級だよりの発行や、必要に応じたメール配信も行った。アンケートでは、昨年度同様8割を超える保護者がそう思うと回答しており、職員全員が教育活動について発信することができたと答えている。今後も継続して取り組んでいく。	今後も教育活動や児童の様子について、学校だよりや学年だよりを発行して丁寧に保護者に伝えるようにし、理解と協力を得られるように継続して取り組んでいく。さらにホームページを活用し、校内研究や学校生活の様子などの発信を充実させていく。また、必要に応じたお知らせ文書やメール配信を行い、迅速な情報発信に努めていく。次年度は情報の精選化を図り見てもらえるような紙面構成をしていく。
11	地域の教育力	◎学習で地域のことを調べたり、地域の行事に興味をもつよう指導した。	今年度は、社会科の研究推進校を引き受け、地域社会と進んでかかわる子を育てる授業づくりに力を入れてきた。1年生では昔遊び、2年生では九九マスターと低学年のうちから進んで地域の方々と交流するようにした。また、地域行事にも職員が参加するなどして盛り上げた。次年度は、市制100周年を迎えることから更に地域の教育力を生かしていき、地域への愛着を深めていきたい。	身近な地域社会を自分に近いものとして感じることができるようにする。地域の素材や人材を核として、社会科、生活科、生活単元学習の研究を進め、子どもたちが伝えあうことを通じて主体的・対話的で深い学びにつながるような問題解決的な学習方法を研究し、社会と進んで関わる子が育つよう、単元構成をしていく。
12	安全・安心な学校	◎登下校のときなど、登下校のルールやマナーを守って生活できるよう指導した。	年度初めの学級活動での指導だけでなく、必要に応じてルールの確認を行った。職員の登下校指導とともに、保護者の協力も得て安全な登下校ができるよう取り組みを続けてきた。その結果、児童、保護者、教員のそう思うが9割を越え、成果が継続されている。	年度初めの学級活動や長期休み前の安全指導について引き続き行っていく。さらに、必要に応じでルールやマナーの確認を行ったり、個別に指導をしたりして、児童の安全を確保していく。また、職員による登下校指導を継続し、気になる箇所はないか、危険な場所や行為はないかを確認し、指導に生かすようにする。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
本校は昨年度から学校運営協議会になり、委員の皆さんから、日頃の教職員の取組に対して感謝とねぎらいの言葉をいただいた。全国的に不登校（傾向）児童の増加が叫ばれているが、本校の状況はどうなっているかという質問があり、本校も同様の課題をもっていて、誰一人取り残さないためにGIGA端末を利用したオンラインでの授業やホームベースでの個別授業などを紹介した。また、保護者と学校だけで解決できる問題ではない場合には他機関と連携し、保護者や本人のフォローをしていることを説明して共感をいただいた。次年度、学校経営方針の柱に位置付けていく必要があることとした。	今年度は、前任の校長の学校経営方針を引き継いで学校運営をしてきた。どの学級も安心・安全に学習に取り組む学級風土を形成することができた。授業中に離脱したり、妨害したりするような児童は見受けられなかった。不登校傾向の児童が増加している中、自己肯定感を引き上げていくうえで前向きに考えていけるような支援を、すべての教職員ができることが次年度に向けての課題である。またGIGA端末の活用は一定の成果をあげているもののまだステップ3の実現には程遠い状況にある。他校の取組を積極的に取り入れていきたい。また、使用状況を互いに交流しあい、スキルを高めていくようにする。子どもたちが明るく素直なのは歌が好きだということも要因として考えられる。音楽朝会や音楽発表会について職員で今後の方向性について議論したが、教育課程を工夫しながら取り組んでいくことで共通理解した。次年度も学校経営の柱の一つとして大切に取り組んでいきたい。また、本校のめざす子ども像の中で「創造」というキーワードがある。異学年での交流や委員会活動などで相手意識が芽生え、相手の気持ちを理解し行動できる児童が増えている。しかし、「創造」という視点では、まだまだ子どもに任せてよい部分が多分にある。学年実行委員や委員会・係活動などで自己肯定感を高めるだけでなく、独自性を重視し、創り出す意識を子どもたちに常に持たせていく。授業においても同様で子どもが学びを創ることを意識していく必要がある。そのために振り返りや課題意識を大切にした授業実践を重ねていく。